



「幸吉の旅」

東京女子高等
師範學校教授

岡 田 美 津

た。爺さんは、煙草に火を點けて、池の側の柳の

下に寝そべつて、暢氣に、唄をうたつてゐた。

「彌平さん！ 彌平さん！ 幸吉は、牛を連れに行つたの。」と、お崎は、幸吉を探しに來たのだつた。

「知らねいよ。俺の方でその内、おめいさんに尋ねようと思つてたんだ。」

「幸吉が行つたかどうか、一體どうして分るんだい。」

「それはな、幸吉が行つたのなら、牛が歸つて來てゐるし、行かなかつたのなら、牛は居ないだらうぢやねいか。俺にアどつちでも、いゝんだ

九

もうあたりが薄暗くなつてゐた。彌平爺さんは、毎晩のことながら、どうしたら、自分の手も足も、動かさないで、牛を牧場から連れて來られるかしら、と考へてゐた。幸吉の姿は、どこにも見えなかつた。もし、幸吉が居れば、その位のこととは、爺さんに代つて、悦んでしてくれるし、御禮には「ありがとよ」と丁寧に言つてやれば、それでよいのだつた。さて、幸吉が居ないとなると、金公に頼むのだが、金口ときたら、しみつたれな奴だから「ありがたう」だけぢや、動きはしない。その代り一錢やれば、やつてくれさうだつ

が。いつだか、こゝへ避暑に來てゐた物識りの人がなア、『ぢつと立つて待つてゐる者も、やはり神に仕へるのである』つて句があるが、俺にもつて來いの格言だつて、言つてゐたつけ。俺も、尤だと思ふなア。あの、あすこにゐる魚！素晴らしいぢやねいか。俺も、魚になりたいな。」

「フン、お前さんが魚になれア、鱗ひれを使ひへらすことなんぞ、あるまいよ。」

「これ／＼、お崎さん。一日働はたらいてゐた俺だ。さう虐いぢめなさんなよ。俺に起きて、幸吉を呼んで歩けといふのか。」

「そんな事してくれないでいゝよ。聲なんか出してもらふと、こんだ聲をひつ込めるのが、面倒になつても、お氣の毒だからね。私や何か、したいと思へば、するだけの元氣があつて、自分でするから、ありがたいことか。」

「お崎さん、おめいさんは、あんまり氣が強くて、何でも獨りでする／＼ツて言つて、折角してやらうつていふ俺たちの樂しみを奪さらつちまふんだな……、」

「一體、お前さん、何時幸吉を見掛けたの。」

「正午ごろから見ないな。晩飯に歸かへらなかつたか
So。」

「歸らない。お前さんと一緒に居ることだと思つたのに。ぢや、牛を連れに去つたんだらう。だけれど、お腹なつかが減へるだらうに。どうも變かだね。」

お鎌さんは、臺所の、明け放した窓の近くに坐つて、菊嬢を膝ひざに抱かかいてゐた。菊嬢は、眠ねさうに、從順おとなしく、可愛らしい恰好かっこうをしてゐた。

「坊や、こゝのお家うちの子になりたいかへ。」とお鎌が訊くと、

「あア、兄にいちゃんも、こゝのあうちの子になユなな
ら、あたち、こゝのあうちの子になユな。あたち

小母ちゃん好き、お崎小母ちゃんも好き、おぢ
いちゃんも好き。しよいニヤゴ好き、しよいう
ちも好き。きエいなおべいと、きれエなおにん
によと鶏と、あたり、みんな好き。」

「兄ちゃんが、よそへ行つてしまつても、坊やは
おとなしく、このお家に居るだらう。」

「いや。兄ちゃんが 行つてしまへば、あたり、
おとなちくちて居ない。兄ちゃんが、行つてち
まへば、あたちも行くの。あたち、兄ちゃんの子
よ。」

「でも、坊やは、まだ小さいから、兄ちゃんと行
かれないの。」

「そんなア、あたり、泣くの。ドタバタやユの。
して見ちエようか。」

「いゝえして見せないで宜しい。と、お鎌は、大
急ぎで止めて、坊や、一番誰が好き？ この小
母ちゃんかい。おちやき小母ちゃんかへ。」

「あたり、兄ちゃん一番好き。」

「いゝもの上げるから、このお家で、この小母
ちゃんの子におなりな、ね。」

「ウン、あたり、このおうちに居て、兄ちゃん
の子になユの。小母ちゃん、すこし、ひといで
おあちよびなちやい。あたり、下りて、お崎小
母ちゃんとこへ行くの。おにんによ、ねかすの
おにんによ、眠いんだつて。」

丁度、お崎が臺所へ入つて来て、

「もう、八時半なのに。幸吉はどこにも居ない
ですよ。彌平さんも、正午からあと見掛けな
いつていふんです。」

「お前折角の計畫が駄目になるかと思つて案じて
ゐるんだらうが。お心配無用だ。この家から
出て行くなんて、あの子に行き場所が、他にあ
るものか。とお鎌は、あてつけたやうに、言ひ
放つた。」

ところが、幸吉は、この家を出たのであつた。

× × × × × × × ×

「緑川 の堤に沿ふて半田の森といふ静寂な、美しい林があつた。緑川は日にきらめきながら、迂曲して流れ、今や、別れ去らうとしてゐる山々と最後の會釋をかはしてゐるやうである。びらうどを敷きつめたかと思える草原は、川邊に下りて、溢れさうな盃を口にしようとして、身を屈め、川沿ひの樹々は、おのが姿を、水鏡に映さうとして、袖や裳を濡らしてゐる。

此方にある池では、葦が、風のまに／＼ゆらゆら靡き、鶉が翼を、水に浸してゐる。彼方にある小路は、牛がのろ／＼とやつて来て、川縁に立ち止まり四方の景色を眺めてから、さて首をさし延べて、飲むワ／＼、神のさこしめす酒かとはかりに、飽くまで、水を飲むでゐる。

此處で、幸吉は、ありつたけの思ひを眼に籠め

て、この美しい景色に「さよなら」をしてゐるのだつた。かれの傍には、いづくまでもと、ポチがお伴をしてゐた。ポチだつて、今までの豊かな生活を思ひ出すと、残り惜しさの涙が出ないでもないが、お主人の惱みを増してはならぬとの忠義な心で、その涙を押しかくしてゐた。

幸吉は、英雄ではなかつた。が、英雄になる素質を備へてゐたといつてよからう。かれを感激させ、かれの想像力を燃え立たせれば、かれはどんな素晴らしい行爲を仕遂げないとも限らない。

幸吉は、今、どれほどのものを自分が捨てやうとしてゐるか、これから先の自分には、どんな事が來るのか、確に知つてゐた譯ではない。この子に分つてゐた事は、お鎌さんが、子供二人は、多すぎると、判然言つたこと、しかも、邪魔なのは、自分なのだといふことゝであつた。その上に、かれはこの緑川の村で、自分を貰はうといふ者は、

誰もないが、自分が傍にさへ居なければ、菊ちやんの行くところは澤山あるといふ事を、一度ならず聞いたのだつた。お崎さんに、四つ葉のクローバを持つていつた時、ちらとかれの耳に、入つたのは、養育院といふ言葉であつた。種々考へ合せて見て、かれは大體の様子を推察したのであつた。幸吉は、死んでも、院といふ字のつく家へは行くまい。これだけは、心にはつきりと決めてゐた。院も結構だ。よその子供には、それも宜からう。だが、自分としては、院は嫌ひだ。何としても、院に行く氣はない。さて、院に行かないとなると他に途がないといふでもない、かれは考へた。もと／＼所持してゐた一圓八十五銭は、今までもある。ポチと自分は、先刻も、黒莓と、堅パンを、大馳走だと思つて食べたのだつた。それに、かれは、年が行かないから、目の前の事より他は何も考へないのだつた。併し、かれは自己犠牲にとい

ふ崇高な行ひをしてゐるのだといふ意識に支へられてゐたのではないから、かれの心は樂しかつたとは言へない。かれは、樹の下に仆れて、

「誰も、僕を要する人がないんだ！ 今までだつてさうだ！ 一體、どうしてだらう！ みんな、

菊ちやんを可愛いがつて、貰ひたがる、それは不思議ぢやないけれど、（ポチやもつとびつたり

お寄り。お前と僕と世の中二人きりだ…… オイ、そつちのポケットに首を入れるよ。こつちには、パンが入つているんだぜ）僕あの肉屋の小僧さんのやうだつたらいいな。あの小僧さん、時々僕を車に乗せてくれたり、肉を諸方へ届ける時に、僕に、馬の手綱をもたせてくれたつけ。それでなけりや、僕、萬屋へゆく途中のあの家にゐるそばかすだらけのあの男の子だといふな。あの子のお母さん、始終、あの子を心配しちや、門のとこへ出てくる。僕、金公でも

いゝ。金公は、三年の間にお母さんが三人、お

父さんが二人出来たんだつて。彌平のお爺さんが言つていたつて。彌平のお爺さんは、僕を「愛がつてくれるけれど、お爺、んのうちへ貰はれるわけには行かない。お爺さんのお母さんといふ人が、ゴチャ／＼ひとが居るのが嫌ひなんだつて。お崎小母さんには家がないし……、だけれど僕は、出来るだけのことをしたんだ。湊小路から逃げて、菊ちやんに、良いお家を見付けてやつたんだから。お母さんが二人もあるんだ。菊ちやんが大きくなつたら、僕の事を聞かせてやつてくれるだらう」そうすれば、僕は、菊ちやんを、あとに置いて行きたくなかつたのが分るだらう。菊ちやんに、そんな事知らせたつて、知らせなくつたつて、菊ちやんは、赤坊なんだから、大きい子は、ちいさい子の世話をするのが、當り前だ。僕は……

幸吉は眠つてしまつた。

× × × × × × × ×

この間に加藤の家では、騒ぎが持ち上つてゐた。夜の九時だつた。お崎は、池から庭へ、物置から納屋へ、門から搾乳場へと、何回となく、行つて見たが、幸吉の影も見えなかつた。菊ちやんは兄ちやんが、歸つてくるまで着物をさかへないと言つてゐたが、とう／＼眠つてしまつて、お崎に抱かれて、二階へ連れて行かれた。お崎が、菊ちやんの脱いだ着物を取り上げると、その懐ぶくろから、疊んだ紙片が落ちた。お崎は、打かへし／＼それを眺めて、それを讀んでみた。それから、一寸前掛のかけでひと泣き、泣いて、急いで、階下の、お鎌さんと、爺さんとが居るところへ降りていつた。「これ、どうです！」と泣いたり笑つたりしてお崎は驚いてゐる二人の前に、その紙片を置いた。これは、幸吉の手紙です。あの子は家を出

たんです。ほんとは、無理もないと思ふ。あんな、神様みたやうな子を追拂つて、野天のてんに曝さらして、それで、まあよかつたといふ人もありませうが！これを、すつかり讀んでごらん下さい。なんていふ子を追出したものでせう。」

× × × × × × × ×

おかまおばさんと お先おばさんとで あたいをこゝに おけないで いていたの あたい氣いた。そして、たれも あたいを もらはないて。それからインのことも いていたね。あたい、インは 氣らいだから、にげて行くの。矢へおぢさんに、とりの 玉子 かへして下され。あたい、も一つの 玉子 こわして すみません。でも あれは つひしたのです。キイチちゃんを、だい地にして下され。あたい 里ばになて キイチちゃん 向ひにくるから。おばさん ながなが ありがと。こゝの内、せかい中

で いちばん、きれな、いゝ内です。 幸吉

あたい こゝの内にいるなら いはないけれど、キンコウは、牛に 石 ぽるの。あんなことすると 牛のちゝがわるくなる。さよなら。 幸吉。

あたい さよなら いひたいけれど、インのことが しんばいだから、こゝに かいておきます。

キイチあんさよなら でお先おばさんさよなら おかまおばさんさよなら 矢へおぢさん さよなら

この手紙はお鎌さんの 慄へる指先から 落ちた。そして 涙が ポタ／＼と その眼から 落ちた。「あゝ すまない事をした！」と稍しばらくしてから お鎌は言つた。——お鎌が こんなに情に動かされたのは 珍らしい事だつた。私みたような 心の頑かたくな女はない。なんとかして

この罪亡^{ばな}ぼしが 出来ないかしら。この子は、
私がかこひいきをしたつて 一言だつて 恨み
がましいことを言はない！ 顔みた最初つから
私は、あの子に 心が惹かれてゐただけれど
あの子の眼が 死んだお政の眼に似てゐるので
昔の事が……、私がお政に 辛く當つて 勘辯
をしてやらなかつたことなんか々 思ひ出され
てね。もし 私が、あのお政を、も少し 可哀
いがつて、居心地よくしてやつたら、家出もし
ないで すんだらうに。それに 私は、儉約
儉約つて つましく暮らして お金を溜めこん
でさ。銀行に 何千圓つて貯金があり、この邊
での大地所持ちになつてるのに、子供二人位育
てられないなんて いつたりして……。お崎や
私のシヨールと帽子をとつておくれ——彌平、
お前 お玉を馬車につけておくれ。あの子が
どこぞに居るものなら、探し出して連れて戻る

のだから！ あの子の連れでもあるなら、それ
も一緒に連れて来て、食べたや寝たりする位
は らしくさせてやらう。」
(つゞく)

